

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

サーミ語の世界 (文化をうつすことば)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5656

サーミ語の世界

庄司 博史 (しょうじ ひろし)
 (国立民族学博物館助教)

サーミ人とサーミ語

少数民族の場合、とくに珍しいことではないといえようが、かれらの人口がどのくらいなのか正確なところはいまだに分かっていない。これはサーミ人の定義が曖昧なことに加えて、その重要な基準の一つであるはずのサーミ人としての意識、つまり自分がサーミ人なのかどうかで迷っている人々がかなり存在するからである。もちろんこの背景には、サーミ人にたいする偏見や差別の歴史があったからだが、現在では、サーミの出自をもちながら、都市化やサーミ社会の分化がすすんだおかげで、サーミの伝統的生業にかかわらず、サーミの衣装を着ず、サーミ語がはなせず、サーミ人の伝統的居住地域の外に住む人々がかなりの部分を占めていることも大きな原因である。つまりサーミの標識と考えられているものをほとんど失ったために、サーミ人であると感じながらも自信を持ってサーミ人と名のれない人が、都市部を中心に数万人はいるとみられている。

かれらをふくめると、おそらく現在のサーミ人の居住地域は、図に示した伝統的居住地域だけでなく、スカンジナビア半島からフィン

ランドの主要都市ほぼ全域に広がり、人口もサーミ人活動家がいっしょに一〇万人近くにはなる可能性がある。

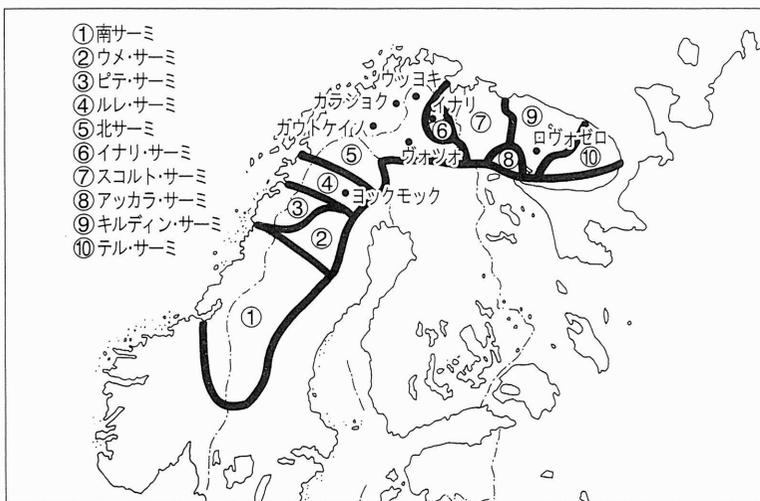
このような理由で、最近までサーミ人の人口としてあげられる数値は、全体、各国の内訳ともに大きな幅があった。しかし、フィンランドが一九七三年にいわれるサーミ議会を設立したのを皮切りに、九〇年代に入つてノルウェー、スウェーデンも同様の機関を設けサーミ文化、経済にかかわる政策についての決定権を移譲し始めてから、やや事情はかわりつつあるようである。これは、議員選出の投票権をサーミ人にかぎつたため、条件を満たす人々がすすんで自主申告しはじめたからである。その条件は国によりやや異なるが、サーミ人意識にくわえ、本人あるいは少なくとも祖父母の一方の母語、あるいは日常語がサーミ語であることで、ことばがサーミ人の最も重要な標識とみなされたことになる。

これらの数値をもとに、現在ノルウェー三万四千七百人、スウェーデン一万七千人、フィンランド約六千人のサーミ人の人口が推定されている。さらにロシア・コラ半島の一九〇〇人を加えて、全体で六万人前後というのが

ほぼ一致する値といえる。ただし、ことばの条件を満たさないために、投票権を持たない人もあり、サーミ人の認定は法的にも問題になりつつある。

サーミ語の方言と系統

サーミ人の条件とみなされたサーミ語だが、すべてのサーミ人がはなしているわけではない。話者数は人口にも劣らずやっかいだ



サーミ語地図



老人でも民族服で日常生活する人は珍しい(カラシヨク)

が、約半数、つまり三万人ほどがはなすとされている。スカンジナビア半島からコラ半島まで約一五〇〇*にわたるサーミ語地域は図のように一〇の方言に分けられる。言語差が大きく、また独自の書き言葉を持つものもある。それぞれを言語とみなす場合もある。ただし、隣接するものの間では変化は緩やかで相互理解が可能であるともいわれる。筆者の経験からも聞いて理解することは少しの慣れで可能である。いずれの方言もサーミ人、サーミ語をしめす語は、北サーミ語の *sápmi* (サーミー) と同じ語にさかのぼり、サーミ人達もことばの同系性を民族としての共属性の標識とみなしている。方言のなかで最大なのは三国にわたってはなされる北サーミ語で、話者数、母語保持率、使用領域の範囲や

書き言葉としても、他をはるかに勝っている。それに対しウメ、ピテ、アツカラ、テル・サーミ語は近い将来消滅することが危惧されている。サーミ語はフィンランド語やハンガリー語、さらには西シベリアのサモイェード語などとウラル諸語に属している。ウラル祖語は六〇〇〇年も前に分裂をはじめたとされているが、現在のサーミ

語には、それ以降のサーミ人のたどった歴史が反映されているといえる。

サーミ語には古いウラル語の特徴として、本動詞とともに用いられる否定動詞、名詞に接続され所有者の人称をしめす所有人称接辞、動詞の分詞形を用いた関係節などの他、すでに系統的に最も近いフィンランド語では失われた双数などが保存されている。音韻面では、ウラル語の大きな特徴である母音調和は失ったものの、子音においては非常に原型に近い形を保っている。

一方でサーミ語はフィンランド語とともにウラル語のなかではもともと西進したことのひとつで、構造的にも近隣のインドヨーロッパ諸語(印欧語)と共通した特徴をもつ。基本語順はS(主語)V(動詞)O(目的語)で、節頭接続詞をもちいた副文構造や前置詞をもち、さらに定活用するコピュラ動詞と本動詞の分詞形によって構成される複合時制などは、スカンジナビア諸語などゲルマン系のことばと驚くほどの一致をしめす。つまりサーミ語は古いウラル語とともに印欧語の特徴も取り込んでいるといえる。このようなサーミ語と文化の形成を知る上でさらに重要な情報をあたえてくれるのは語彙である。

サーミ語とサーミ文化の形成

サーミ人たちは極北のトナカイ遊牧民というイメージから、およそ西欧社会とはかけ離れた文化や社会をもっているとみられがちで、テレビなどでもそのような紹介をされる



カウトケイノ丘陵のトナカイ解体所に集まったサーミ人

ことが多い。しかし、サーミ語のなかに取り込まれている借用語からみえてくるのは、かれらがか昔からヨーロッパにおいて、印欧系の人々と接触していたすがたである。

サーミ人の祖先がフィン人の祖先とともにバルト海沿岸でバルト系の人々と接触し始めたのは三〇〇〇年以上も前とされているが、「嫁」、「友人」などの借用語によって、かれらと友好的な関係があったと推測されている。その後のフィン語にみられるような膨大な古代ゲルマン語の借用語の欠如によって、農耕に移ったフィン人の祖先とこととなり、サーミ人は内陸部からスカンジナビア半島北部で狩猟生活を続けたとみられる。しかし紀元後まもなく、かれらはスカンジナビア半島北部の海岸地帯で古代スカンジナビア人と接触を始めたとき、ヴァイキング時代をへて現在にいたるまで、約三〇〇〇もの借用語をとりいれている。これらの語の中にはサーミ

の信仰、装飾、そしてトナカイ飼育などサーミ文化の基層にまでおよぶものがあり、トナカイの搾乳、チーズづくり、耳印などにかかわることはその例といわれる。

もちろん、サーミ人がまったくヨーロッパ化したわけではない。むしろ伝統にヨーロッパの文化をとりいれながら、極北の自然環境と共存する独自の生活様式を造り上げてきたといえる。この点ではサーミ人は、ヨーロッパにおいて特異な存在といえるかもしれない。当然のことであるが、サーミ語には極北の自然や伝統的生業にかかわる語彙が極めて豊富で、氷や雪をあらわす語は三〇〇にもおよぶ。また、おじ、おばをさす語が母方、父方や年齢の上下で異なるなど、かつての親族構成をものがたる特徴ものこっている。言語使用において、興味深いのは、はなし相手に対して、いわゆる丁寧表現のための二人称複数形を使用しないことである。これは、フィンランド語をふくめ、ほとんどのヨーロッパ語に共通する現象であるが、この欠如は、サーミ社会の階層分化が遅かったことと関係しているのかもしれない。また個人名は基本的に姓がなく、必要な場合には父親の名に続けて呼ばれる習慣があったが、これはサーミ人のあいだでは姓がつくられた今もおこなわれている。

サーミ社会とこれからのサーミ語

サーミ語は上に述べてきたように、特に過去数百年の間周囲の言語とは緊密な接触関係

にあり、様々なレベルでの影響を受けてきた。しかし、ことばはそのような影響下にあって、子どもたちがそれを母語としてうけつぎ、また日常生活の大部分をそのことばで過ごせるかぎり問題はない。サーミ語もまだ数十年前までは、多くの地域でそのような状態であった。しかし、最近までサーミ語は、サーミ人の伝統的生業をいとなむトナカイ・サーミたちのあいだで活力のあることばとして用いられ保たれてきたといつて過言ではない。それも多数派語との併用言語としてであった。そして、公的な地位もなく、書き言葉としても用いられないため、かれらのあいだでも次第に話者の数は減少し、日常語としてもその範囲は縮小しつつあった。

しかし七〇年代を境として、サーミ人の民族意識の高まりとともにサーミ語の重要性が見直されはじめ、その復権のための運動が民族運動の中心的役割をはたしてきた。表記法を統一し、近代語として用語や文体を整備する一方、サーミ語を教育に用い、また公的地位を獲得することが大きな目標とされた。この運動は近年次第に成果をむすびつつある。

北サーミ語の正書法が七八年に統一されたのをきっかけに、現在出版物の種類は飛躍的に増大し、教科書、絵本から文芸書まで年間数十点はくだらないと思われる。ノルウェーではサーミ語の新聞が二紙発行されており、各国ともサーミ語専門のラジオ放送をおこなっている。教育では、サーミ地域では希望

する場合には義務教育をサーミ語で受けられるほか、原則として幼稚園から大学まで一貫したサーミ語教育が可能となっている。

そして九〇年代のはじめ、フィンランドとノルウェーでは相次いでサーミ言語法が施行され、サーミ語は地方的公用語の地位を獲得した。これによって基本的に公的サービスは文書、口頭においてサーミ語で受けられることになった。サーミ語がはじめて多数派語と同じ地位を与えられたという象徴的意味にくわえ、この法律によりサーミ人の若者に通訳、翻訳、公務員などの職が保証されることになり、サーミ語学習への契機となること期待されている。またサーミ地域では役所名や道路案内が

サーミ語で表記され始めている。サーミ人のことばを守る信念と努力とともに、おくれげせではあるが、数方にすぎないサーミ人に対する一般市民と国家の理解と協力があつたことはいうまでもない。



フィン語（上）とサーミ語で書かれた飛行場の案内（イナリ）